

小林多喜二「党生活者」論

— 根底に横たわる前近代性 —

岸 本 加代子

はじめに

「党生活者」は一九三三年八月二五日に脱稿、翌年『中央公論』四月号、五月号に掲載された。その際編集者によって「転換時代」という仮題が与えられ、削除と伏字は七五カ所、一四〇五九カ所に及んでいる。

また作品の末尾に（前編おわり）と記されているように未完の物語である。この後「後編」で完結するのか、「中編」が入るのか、突然の警察権力による作者の拷問死によってその規模すら分らない。しかし、小林多喜二が全体において主張しようとしたことの土台、また続編において展開しようとした問題提起を読み取ることは可能であろう。

登場人物の人間関係を論じた先行論には、「私」と笠

原の関係を焦点を当てたものが目立つ。

島村輝は「党生活者」論序説—「政治」と「文学」の交点—（『国文学解釈と鑑賞』別冊・「文学」としての小林多喜二（二〇〇六年九月）において「小林多喜二の問題意識が「すべてを組織の尺度で見ることが任務である人間」の持つ苦悩と矛盾の処理」にあったのではないだろうか」と指摘した上で、次のように問題を提起している。

主人公であり語り手である佐々木の、笠原に対する扱いや感覚が、やがて根本的に批判されるような展開を多喜二が構想していたのではないかとの推論を許すような伏線が、たしかにこの作品には含まれている。端的に言えばそれは、組織の仕事に対する

当然の「犠牲」ということでは解決しない「人権」の問題の所在である。

しかし、島村は「苦惱」あるいは「人権」の問題の内容について、具体的に明らかにしていない。

一方、宮本阿伎の「多喜二が描いた新しい女性像——リアリズムの深化にそくして」（『小林多喜二生誕百年・没後七十周年記念シンポジウム記録集』白樺文学館多喜二ライブラリー 二〇〇四年所収）は伊藤について「積極的な面が十分な根拠を持たせて、魅力的に精彩を放ち描かれている」ものの、彼女の中に「潜む矛盾」を十分に描ききつてはいないという。また笠原については「多少悪役を強調しすぎた」としても「現実的な矛盾をはらむ女性の姿」があるがままに描いたのだとする。

これらの論考は「私」と笠原の関係は作者によって意図的に創作されたとするものがある一方で、不十分な描写力によるものだという見方を示しているが、そこに込められた作者の隠された意図を明らかにしたとはいえない。

本稿では基本的に前者の立場をとり、「佐々木」即ち「私」と笠原の関係を中心に、伊藤や母、その他の人物との関係についても考察し、本作の隠されたモチーフについて検討する。

一

物語は縦軸に満州事変勃発と同時に軍需工場と化した「倉田工業」における搾取と臨時工解雇に対する労働者たちの闘いを、それをリードする共産党細胞に属する黨員たちを中心に描いている。横軸には主人公「私」の非合法生活における家族、妻や母との関係に生じる矛盾や苦悩を描出している。

語り手は「私」であり、作品世界はその視点で語られる。よって客観的な事実と主観的な感情は切り離して読み取る必要があるし、「私」自身が捉えきっていない「私」の心情や状況があることも指摘しておきたい。

「私」は「佐々木安治」という名の共産党員である。年齢は特定できないが「今六十」の母を持ち、下宿の「お

ばさん」の目にも「まだ若い」青年である。家族は母、弟、妹、後に妻がいるという状況で、以前は合法的な労働組合運動をしていたが、同僚が検挙されたことから、地下活動を余儀なくされている。

「私」は「倉田工業」が出征した労働者の補充とパラスシュートの側とガスマスクといった「軍需品製造の仕事が急に高まったため六百人もの臨時工を「厳重な調査」もせず、「身元引受人」なしで募集した時、「他人の履歴書を持って入りこんだ」のであった。

「私」の任務は労働者たちに戦争の本質を知らせ、労働条件の改善と臨時工の解雇撤回を実現すること、そのためにも労働者の中に党員を増やすことである。そして労働者たちのなかに信頼を築きつつあったのだが、同僚で共産党員「太田」が検挙され、逮捕される危険を感じた「私」は工場から身を引き外部から「残った同志との連絡をヨリ緊密にし」て活動している。

物語は同僚で同志である「須山」とのつぎのようなやり取りで始まる。

「まだか？」

そのとき、後に須山が来ていて、言葉をかけた。彼は第二工場だった。私は石炭だらけになった顔で振りかえって心持眉をしかめた。それは前々から須山との約束で、工場から一緒に帰ることはお互い避けていたからである。そんな事をすれば、他の人の目につくし、万一のことがあった時には一人だけの犠牲では済まないからであった。

この描写だけを見ても、運動を發展させるために、「私」が党組織を守ることを第一と考え、実際の行動においても原則を大事にする資質を持っていたことが読み取れる。「私」は権力から身を守ることに非常に用心深い。それは運動の發展と表裏一体の関係にあるのだ。「私」の生活の土台にはこの観点がある。

下宿のおばさんや子どもとの交流、連絡時の慎重さもとより、逃亡時の準備等日常の努力は機転の良さや適切な判断力につながっている。

また「私」は次のように意識変革の達成を語る。

一定の生活が伴わない人間の意識的努力には限度がある。一切の個人的交渉が遮断され、党生活に従属されない個人的欲望の一切が規制される生活におかれてみて、私が嘗て清算しようとして、それがこの上もなく困難だったそれらのことが、極めて必然的に安々と行なわれていたのを知って驚いた。

さらに「私」は「個人的生活が同時に階級的生活であるような生活、私はそれに少しでも近付けたら本望である」と考えている。

「私」の党生活者としての優秀さは、確かに強調されている。が、その内実を理解するためにもここで、「私」と母の関係についてみておきたい。

大田務は「党生活者」を読み直す―いわゆる「笠原問題」に触れつつ（『民主文学』二〇〇八年二月）において、母が「今六十だから明日死ぬことがあるかもしれない、が死んだということが分かれれば矢張りひよつとお前が自家へ来ないとも限らない、そうすれば危ないから

死んだということは知らせないことにしたよ」と言ったことについて「佐々木がいま母の世話を全く出来なくなつた時に、母の方から最大の理解をもって、このような「決心」がされる」とし、「私」の意識変革と母の成長とが相互作用的になされっていると位置付けている。

母にとって「私」は突然、連絡を絶つた息子である。官憲に追われる子をもつた母として、自らも非難を受けただであろう。しかし、「私」の仲間である須山に対して、非難めいたことは一切言わない。母の言葉は情愛に満ちたものである。母が「私」たちの運動を理解しようとし、支持しているのは明らかである。

しかし、「私」の方はどうであろうか。地下生活に入りたいきさつを淡々と語る「私」や、須山に「会つてやれよ」と半ば強引に促される姿からは、母の行為に隠された苦しさを理解しようという姿勢は見えにくい。

二

こうした「私」の一貫した姿勢は笠原に対して最も強

く現れている。時系列的に「私」と笠原の動きと心情を追ってみよう。

笠原は左翼の運動に好意をもち、「私が頼むと必ずそれをやってくれた」「彼女はもう殆んど知っている家は、私のために使ってしまった」「しきりに頭を傾げて考えていた」などと描かれているように「私」にとつて頼りになる好ましい支援者として初めは登場する。同時に「私が頼むと」「私のために」など、笠原も「私」に好感を持っていたと「私」は認識している。

「私」と笠原の関係は、官憲に下宿を押さえられ、身の危険を感じた「私」が笠原の部屋に泊めてくれるように頼んだことから大きな展開を見せる。

笠原は私の顔を急に大きな（大きくなった）眼で見はり、一寸息を飲んだ。それから赤くなり、何故かあわてたように今迄横座りになっていた膝を坐り直した。

しばらくして彼女は覚悟を決め、下へ降りて行った。S町にいる兄が来たので、泊まっていいくからと

ことわって来た。(略)彼女はさすがに固い、緊張した顔をしていた。

予想もしなかったことを頼まれ、「私」が男性で自身が女性であることを意識した笠原の右の様な態度からは彼女の素朴だが律儀な性格が見える。その夜、寝つきが悪く何度も眼を覚ました「私」は笠原が「最初から朝まで寝ない心算でいたことをハッキリさつた」のだった。翌朝、「眠れた？」と訊く笠原を「私」は「なんだかまぶしく」感じている。ここには、彼女の「覚悟」に感謝する「私」の姿がある。また「緊張」と安堵感を共有できたことも、その後「私は笠原と急にしたしくなった」ことと無関係ではないだろう。

こうした経緯の中で「私は笠原と一緒にすることを考える。それは、「非合法の仕事」を確実に、永くやっ行ってくたためにも」「都合がよかつた」のだ。自身の心情を述べる「私」の言葉からは、笠原への親しみ、良くとれば愛情が読み取れる。「非合法の仕事」(略)やっ行ってくたためにも」と表現されており、「私」の思いはすべて

が打算だったわけではない。意識していようと、いなかろうと一般的な結婚にも打算は多く見いだされる。しかし、「都合が良かった」とあるように、結局は党活動のための、一種の手段としての結婚であつたといえるのではないだろうか。

笠原はどのように反応したであろうか。

彼女は驚き、即答しない。性急に返事を促す「私」に対して無言を押し通している。求愛された喜びも、一緒になれば当然予想される困難に対する不安も表現されてはいない。無言は何を意味するのであろうか。少なくとも喜びの表情は見られない。

再度「私」のまえに現われた笠原は一つの特徴を示す態度に終始する。つまり、彼女は「私の前に今迄になくチヨナンと坐」り、「肩をつぼめて」「体を固くして」いる。これは「私」から部屋にとめてくれるように依頼された時の笠原の態度に共通する。

後述する伊藤にも見られるもので、男性を意識した時、思わず表現された常識的な女らしさといつてよいだろう。この際、「男のような明るさで叫んだ女らしさを

何処にも見」出だせなかつたのはともかく、そんな笠原を「私」が「不思議に眺めたこと」に注目したい。結婚と言う男女の一大事を仕事、非合法の党活動という視点で捉えていく「私」の思想の内実を示している。

一方笠原は、話が途切れると「モジ／＼」し、自分から返事をしようとはしていない。「私」に促される形で返事をする。「私」は「彼女は自分の決心を決めて来ていたのだつた」と認識するが、事実は分からない。喜びを表わす表現が一切ないことから、ここでも「私」に押し切られた可能性がぬぐえない。それは、当時、一般的に見られた結婚に対する女性の受動的態度とは言えるが、笠原の場合、特に独自の意志を持ちにくく主張しない傾向が強い。この後、二人の関係は笠原のこの受動的態度と「私」の思想の内実を一つの土台に展開する。

新しい生活の初めの頃は、「私」の非合法生活を援助する笠原が描かれている。彼女は「私」の指示によって「色々な新聞」を買ってきたり、自発的に「時々古本屋から「新青年」を買ってきて、「私」に読」むことを勧めている。困難な中でも協力し合う二人の姿が見られる。

「私」の語りを通しての笠原への評価の変化は、第六章の「倉田工業がいよいよ最後の攻勢に出」、労働強化と「ファシスト、社会ファシスト」らの労働者攻撃に「私」、須山、伊藤がまさに「生命がけ」で戦う中で訪れる。

この変化のきっかけ、理由について前述の島村は次のように述べている。

須山の前で佐々木が伊藤に「結婚はまだか」と問う場面がある。「まだまだ」という伊藤の答えに続けて、須山の「革命が来てからだそうだ。わが男の同志たちは結婚すると、三千年来の潜在意識から、マルキストにも拘らず、ヨシ公を奴隷にしてしまうからだ」という言葉がある。そしてまさにこの言葉を境とするようにして、佐々木の笠原を描く言葉の質が変わっていくのである。という事は、まさに佐々木こそこの須山の言葉のように「結婚すると相手を奴隷にしてしまう」活動家の一人に他ならなかったことを示唆していることになろう。

このきっかけについては島村の論に加えて、続く伊藤の結婚の「相手」に関する「私」の感想の中に矛盾があることを指摘したい。

私は自分たちの周囲を見渡してみても、伊藤と互角で一緒になれるような同志はそんなにいません。思っている。彼女が若し本当に自分の相手を見出したとすれば、それはキット優れた同志であり、そういう二人の生活はお互いの党生活を助成し合う「立派な」ものだろうと思った。

女性がすぐれた同志である場合、つまり伊藤には「互角で一緒になれる」「良い奴を世話しよう」と「本気で」云う。しかし、一方で「私」自身は妻に「互角に一緒になれる女性ではなく、非合法生活を続けていける都合の良い女性を選んでる。根底には、男性中心の家父長制家族制度に基づく家族観、女性観があるのではないだろうか。

「私」に対する伊藤の反応も指摘したい。

伊藤は「私」の「まだか」の意味を理解した時「顔の表情を（瞬間だった）少し動かし」動揺している。そして「良い奴を世話してや」という「私」に「苦い顔を」向けている。この動きを「私」は表面的にしか認識していないものの、伊藤の「私」への何らかしを表現しているのではないだろうか。

しかし、この後、伊藤への評価の裏返しのように「私」は笠原に対して「いかにも感情の浅い粘力のない女」「前は氣象台だ」などと断罪してしまうのである。が、果たして笠原への「私」の評価は当たっているだろうか。

笠原はまず、「私」の非合法生活を自らの労働によって支えている。さらに炊事や洗濯などの日常生活の重い負担にも耐えている。この点での笠原の不満は表明されていない。新婚生活の中で「一緒に散歩に出たい」「夜家においてほしい欲しい」というのは実現不可能であっても当然の願いであろう。「私」の評価は「我々の様な仕事をやって行くこと」から出された判断である。

笠原が解雇された後の二人の言動を見てみよう。

「私」は「最後の手段」として「勇気を出して」「カフ

エーの女給になったらどうか」と提案する。対して笠原は、「女郎にでもなります」と返している。

当時、昭和初期のカフェの実態はどのような状況にあったのか確かめてみたい。

佐多稲子は自身の女給の経験を踏まえて「女給の生活」〔改造〕一九三〇年五月）を発表し、「私の知る範囲では、彼女は彼女一人だけの生活を支えればいいという、そんな人はまったく一人か二人に過ぎ」ず、多くの女給が家族の生活を支えるために働いていると記している。また「いたるところの街うちにある無数の小さなカフェ」とその数が多いこと、さらに「この頃では酒場といふものが別に来る、そして新しい喫茶店がどん／＼殖え、今までのカフェといふものがすっかり種類別になつてゆきつゝ、あるようです」と状況を伝えている。

また、中村舜二は「大東京聯覧」（一九二五年六月、大東京聯覧刊行会）の中で「近來諸多の罪悪や男女の醜關係が、このカフェを中心に類、として続出連発し、高級の学生が少なからずこの渦中に巻き込まれ、絶えず新聞紙の三面を賑わしていることは、注目を要する

時代相の一つである。」と記している。加えて警視庁は一九二九年九月、管下の警察に「客の誘引は禁止、女給と客の同伴外出禁止、女給が芸妓類似の行為を行うことの禁止」などを通達した。「カフェ」「バー」等取締り要綱」を配布している。また構造設備についても「別室・隔壁、客用の浴室・寝台がある、照明が著しく暗いか異様なときなどの場合、営業そのものが不許可」とされたとのことである。

つまり、女性がある程度の収入を得ようとした時、特に急を要する場合に、得やすい職として「カフェの女給」があった。しかもその仕事は、風紀的にも「転落」する危うさを伴っていた。

この「私」と笠原のやり取りは、右のような背景が表れているのである。

さて夫である「私」からのその提案を笠原はどのような気持ちで聞いたであろうか。

「急に身体を向き直し」、「暗いイヤな顔」で「頑くなくに黙りこんだ」後、感情的に反発する笠原に見る落胆と憤りは当然といえる。「私」はそんな笠原に、社会変

革の運動と犠牲、組織と人間について語り、理解を求めた。笠原は聞いてはいたが、一言も言わずに黙ったままであった。ここでも彼女は自分の意志を語らない。

まもなく笠原は「小さな喫茶店」に就職する。「一日じゅう立っているって、つらいものね。」と訴える彼女を「私」は労わり、個人の労働のつらさを階級的なものと捉えるように説く。笠原は「本当に！」と言うが、この言葉が共感か、反発か、あるいは疑問をしめすものかははっきりしない。彼女は積極的に自分の思いを告げようとはしない。

その後、笠原は喫茶店に泊り込み別々に暮らすことになった。一晚を同じ部屋で過ごしたことから始まった。「私」と笠原の関係は大きく乖離していくことになる。「私」は笠原に対し「色々な本を届けたり、出来るだけ色々な話をしてやっていた」が、笠原はそれらに応えることなく「今迄よりモット色々なことをおっくうがり、ものごとをしつくく考えてみることもしなくなった」と「私」は云う。しかしそうなることを「私」は十分予想していたではないか。

そして革命家としての仕事の多忙さから、「私」がそんな笠原の元を訪れるのは「たゞ交通費を貰いに行く」と、飯を食いに行くことだけになって、彼女と話すことは殆んどなくなつてしまつていた」のだ。これでは笠原は「私」の奴隷である。

物語は淋しそうな顔をしている笠原を十日も訪れず、初めて伊藤と比較し、彼女が「如何に私と遠く離れているか」自覚するところで前編を閉じている。

総じて笠原に対する「私」の評価が的確とは言いがたいこと、同時に笠原をきちんと受け止めることもなく、自己の価値観で生活を一方的に主導していく「私」にこそ問題があることを押さえておきたい。

宮本阿伎は笠原の人物像について「多少悪役を強調しすぎた」としているが、そうではないことは明らかである。つまり笠原は「悪役」どころか、「私」の被害者である。

伊藤の結婚について、須山は「わが男の同志たちは結婚すると、三千年来の潜在意識から、マルキストにも拘わらず、ヨシ公を奴隷にしまふからだ」と言つた。「私」はこの言葉の実践者に他ならない。島村の指

摘は的確である。

では「私」の何が問題なのか。単に「私」という個人に属する問題なのであろうか。

三

以上見てきたように、笠原は一つの特徴をもつた女性である。彼女は依頼に何とか応えようとする善良さを持つているものの、はつきりと断ることができない。また自分の意志で積極的に動こうともしない。自分の部屋に「私」を泊めたときも、結婚も、喫茶店で働くこともズルズルと「私」の求めに応じている。では、笠原は「私」を信頼し、支持しているのだろうか。

彼女は左翼の運動については支持している。しかし「私」の運動を全面的に支持しているかどうかはわからない。むしろ口には出さないが、犠牲は精神的、経済的、生活全般にわたるもので疲労感が彼女の表情から読みとれる。

大田務は先述の論考において、母と「私」の関係につ

いて「小林多喜二」の作品の閲歴から見ると、「東俱知安行」で葛藤された、運動への参加によって避けられないかに見えた困難さが、この「党生活者」では主人公の成長とともに、家族の成長によって暗黒の時代を打開の展望を持って描かれるにいたったのである」と述べている。

確かに、「近親者の成長との相互作用」は「私」と母だけではなく、伊藤とその母の場合も描かれている。しかし、犠牲、革命運動の矛盾と言う点に関して言えば、物語の主眼は「私」がそれをどのように捉えているかということであろう。

小林多喜二はこれまでの作品にも同様の立場の人物を描いている。例えば「東俱知安行」の水沢老人や労働組合幹部の鈴木がそうである。娘の売春によって支えられていることを自覚している水沢老人は、その事実を見つめたときがっくりと首を落とす³⁾。小林多喜二はその様子をひねられたときの鶏だと表現した。貧しさの中で盗みをすると言う妻を鈴木はぶん殴ることしかなす術を持たない⁴⁾。彼等は矛盾を見つめ、その中を生きている。そんな自分を決して認めてはいない。

「私」はどうであろうか。

実は、母との関係でも、須山との話の中で話題が「だんだん小さくなってゆく」母に及ぶとすぐに「話の尻を切つてしま」う。笠原に女給になることを提案した時、「暗いイヤな顔をした「彼女から眼をそらし」、笠原が「黙りこ」むと「私も仕方なく黙つてい」る。問題をきちんと見つめようとはせず避けている。

また「母はよそ行きの一歩い、着物を着ていた。それが何だか私の胸にきた。」など母との関係では、運動以前の実生活に基づく「私」の思いが描かれている。一方で笠原その人を無条件でいとおしく思い、いつくしむ場面は皆無とさえいえるのではないだろうか。「久し振りに自分の胡坐のなかに、小柄な笠原の身体を抱え込んでやった」時でさえ運動との関連の中にあつた。

さらに、喫茶店に職を得た笠原が「ずる／＼と低い方に自分の身体を傾けてゆく」ことを予想しながら「センチメンタルになっていることは出来なかつた」と問題を後景に追いやり、それ以上考えようとしていない。果たしてセンチメンタルな事柄なのだろうか。

店に住み込むようになってから「雰囲気はこの上もなく悪」い笠原を「投げ出ししているわけではない」といながら、「時々淋しい顔をしている」笠原に「そんなにか、ずり合っていることは出来なかった」として彼女を切り捨てている。それは、自身の自己犠牲を盾に笠原への犠牲の押し付けを正当化している姿と言えないだろうか。

「私」と水沢老人、鈴木は明らかに違う。「私」には物語を通して貫かれた二つの特徴がある。それが水沢老人や鈴木との違いを形作っていることなのかもしれない。

その一つは革命運動を第一義的なものと位置付け、そのために生じる自分と家族の犠牲を「私」は仕方がないものと捉えていることである。二つ目の特徴は、「私」の行動の根底にある、男性中心の家父長制に基づく家族観、女性観である。

前者の例をあげれば、「私」は笠原や伊藤が「私」に對して示す常識的な女らしさを理解しない。彼女等を運動のパートナーとしてしか見ていないからだ。後者について言えば、伊藤が「人眼をひくような綺麗な顔」を利用して男工達と親しくなり、運動に誘うやり方に疑問を

感じていない。常に性の対象としてみる女性観からすれば当然であろう。

家族の生活のために家長は心痛めながらも娘の身売りを決定して来た時代である。「私」が同様の家族観を引きずっていたとしても不思議ではない。

さらに、侵略戦争の進行が国民生活に矛盾を押し付け、「倉田工業」での闘いが激化したこともある。非常な多忙の中に追い詰められた「私」がいつそうの犠牲を笠原に押し付けたという側面も見逃してはならない。

階級のない社会の建設、全ての人々の抑圧からの解放をめざした運動に献身しながら、自身の中には前近代的な体質を抱えていた、そして、その自己矛盾に気付いていない・・・これが「党生活者 前編」における「私」の実態といえよう。

まとめ

以上、本文に描かれた客観的な動きに即して「私」と笠原の関係について考えて来た。

党活動を第一義的に考える「私」と意思決定と言う点で弱さをもつ笠原の結婚は、愛情がなかったとは言いがたいものの、打算と流された結果のものと言えるだろう。

しかしながら、笠原は愛情を豊かにしようと一緒に散歩に出ることなど望むが、非合法生活の「私」にとつて、それは論外の要求であり、理解しない。以後、経済的にも、日常の具体的な生活においても、笠原は「私」の党活動を支えるものとして存在するようになる。

さらに解雇された後、彼女は体力的にも、性的にも、気持ちのうえからも大きな犠牲を負うことになる。それは奴隷主と奴隷の關係さえ髣髴させるものである。

そして、こうした關係の土台には笠原の生き様も含めて、彼らのなかに厳然と存在する前近代的家族観、女性観があったといえる。

小林多喜二は検束の危機と常に向き合うなかでの階級闘争、いわば日常が極限状態とも言える党生活の実態を見つめリアルに描いた。発表にあたって彼は、編集者に「今までのプロレタリア小説の型から抜け出ようと、努力してみた作品です。今迄の私の一系列の作品から見

ても、私はこの作品の成果を特に注目しています。」と述べている。実は続編で、笠原を奴隷のようにした「私」を糾弾するつもりだったのではないか。

「党生活者」は小林多喜二が政治的主張だけではなく、活動にかかわる人間の弱さも欠点も「文学」として表わそうとした「作品」ではないだろうか。

注

(1) 津田孝「婦人問題と小林多喜二」(『民主文学』一九八八年二月) などがある。

(2) 本文第八章に伊藤に関する次のような描写がある。伊藤は何時もは男のように大股に、少し肩を振って歩くのが特徴だった、それが私の側を何んだか女ツぱく、ちょこ／＼と歩いているように見えた。別れるとき彼女は「一寸待ってネ」と云って、小さい店家に入って行った。やがて、買物の包みを持って出てくると、

「これ、あんたにあげるのー」

と云つて、それを私に出した。そして、私が、「困つたな！」と云うのに、無理矢理に手に持たしてしまつた。

「此頃あなたのシャツなど汚れてるワ。向うじゃ、ヨクそんなところに眼をつけるらしいのよ！」

(3) 小林多喜二「東倶知安行」(『改造』一九三〇年

一二月)

「せっかく待っている娘さんに……」

「娘？」老人は酒臭い顔をその時あげた。

「いや、せっかく待っている娘さんに、停車場のお土産でも買つて行つて下さい。」

私は耳に、口をあて、大きく云つた。老人は頭をガクツ、ガクツとうごかして、首をひねられたあの鶏のように、ガクリツと首を前に落としてしまつた。

(4) 小林多喜二「東倶知安行」(『改造』一九三〇年

一二月)

鈴本は折鞆をあけると、中から無造作に赤い林檎を二つ三つ手づかみに出して、私達に分けてくれ

た。

「本当はねえ、吉川君、今来るときさ、嬢をブンなくってしまったんだよ。」国なまりのアクセントでそう云うと、お人好しのように唇でムフ、フ、フと笑つた。「然し勝手なもんだなあ、三週間も家を放つておいてな。」(略)

「嬢がな、何も無くなつたから、飯を炊く炭や石炭を貯炭場から盗んでくるツて云うんだ。俺ア困つちまつたよ。」

※「党生活者」本文の引用は『定本 小林多喜二全集』第八卷(一九六八年四月、新日本出版社)に拠つた。

(本学大学院文学研究科博士後期課程)